

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520203

研究課題名(和文) アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバル化の研究

研究課題名(英文) A Study of Textile Globalization of Aisa, Europe and Africa

研究代表者

吉本 忍 (Yoshimoto, Shinobu)

国立民族学博物館・民族文化研究部・教授

研究者番号：10124231

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネシアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳を始めとする資料の検討によって実証的に明らかにしたものである。本研究を通して、私たちが経験する伝統工芸の変革と文化の創出の場面におけるグローバル化の功罪などの本質的意義について批判的視座を提示した。

研究成果の概要(英文)：The objective of the study is to clarify global history of the printed textile by investigating the sample books preserved at the museum and archives. We clarified that printed textiles, which are popular and now are widely used in Asia and Africa for Women's garment, have produced by imitating the traditional Indian and Indonesian textiles by the European companies during the Colonial era.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：更紗 プリント更紗 グローバリゼーション 染織 アフリカ インドネシア インド ヨーロッパ

## 1. 研究開始当初の背景

産業革命以降、布の生産技法は進展し、私たちの衣装文化に大きな変革をもたらしてきた。動力で稼働する機械の導入により木綿糸や綿布が大量生産されるようになり、また合成染料の発明によって木綿布の多色による模様染めが簡便化されるようになったことが、従来は天然の素材を用いて手仕事によって製作されてきた木綿布製品を大きく変化させた。更紗は、手仕事から機械を用いた生産形式へと展開してきた。技法的展開の背景には、19世紀から20世紀初頭にかけての各東インド会社による交易、ヨーロッパ列強による植民地支配のもとでの繊維製品や技法のグローバルな流通があることを、研究代表者である吉本忍と研究分担者である金谷美和のこれまでの研究で明らかにしてきた。研究代表者である吉本は1970年代よりインドネシア全域での調査を重ね、インドネシアのジャワ更紗の技法、デザインの歴史的展開についての研究を行い、ジャワ更紗資料の収集、産地ごとの技法やデザイン様式についての詳細な映像データを収集してきた。その成果は展覧会「ジャワ更紗——その多様な伝統の世界」(1993年に国立民族学博物館)と図録にまとめられた。その後、インドネシアで発見されたインド更紗を様式によって分類し、相互的なデザイン上の影響関係について明らかにした。その成果は、展覧会「知られざるインド更紗——南海の島々インドネシアにおける発見」(1996年～1997年、京都府京都文化博物館など)と図録においてまとめられた。さらに、ヨーロッパとケニアに存在したプリント更紗のサンプル帳の調査を行い、ジャワ更紗がヨーロッパ、のちに日本で模倣されてアフリカに輸出されアフリカン・プリントして展開していったことを明らかにした。その成果は、「更紗今昔物語——ジャワから世界へ」(2006年、国立民族学博物館)と図録においてまとめられた。

ここでは、伝統的な技法によるものを「更紗」、直接捺染法によるものを「プリント更紗」と区別する。ジャワ更紗の技法は、防染剤であるロウをチャンティンという道具によって置き、液体状の染料に浸染する。プリント更紗は、木製の凸版(木版)、あるいは木製の台座に銅版を埋め込んだ凸版(銅版)などを使用したブロック・プリント技法や、木製、あるいは銅製凸版のロールを使用したローラー・プリント技法によってプリントされてきた。現代アフリカで流通しているプリント更紗には、西アフリカを中心として展開してきたワックス・プリント(布の両面にロウをプリントしたのちに浸染をした両面染めのプリント更紗)、片面染めのファンシー・プリントと、東アフリカやマダガスカルでのみ普及している片面染めのカンガがある。

一方研究分担者である金谷は、1997年よりインド西部グジャラートにおいて染色職

能集団の人類学的研究を行ってきた〔金谷2007〕。インド洋海域における紀元前にさかのぼる交易の研究の中で、グジャラート商人の果たす役割の大きさ〔家島1994〕や、グジャラート産の布が主要な商品の一つであったことを示す研究〔Gittinger 1982; Guy 1998〕が蓄積されつつある。それらの先行研究を踏まえて、2006年にグジャラートから東アフリカ沿岸部に移住した染色職能集団の調査を行った。その成果として金谷は、西アフリカで普及しているプリント更紗は、主にジャワ更紗を起源として展開してきたものである一方で、東アフリカで流通しているカンガは、デザインの特徴からインド西部グジャラート地方の染織品が起源である可能性を指摘した。また、吉本と金谷は共同で、2006年よりアフリカ、インドネシアむけのプリント更紗を製作、販売していた近畿地方の繊維会社において、サンプルの調査や技術者へのインタビューを行っている。その結果、1940年代から1970年代にかけてヨーロッパに代わるかたちで日本での西アフリカ、東アフリカ向けのプリント更紗の生産、輸出が拡大していたことが明らかになった。上述したこれまでの研究より、プリント更紗には、ジャワ更紗から展開したもの、インド染織品から展開したものの二つの系譜があり、それらは相互に影響関係があるという仮説を立てることができる。本研究は、これまでの吉本と金谷の研究をさらに進めて、プリント更紗のグローバルな技法的、デザイン的展開を明らかにするものと考えた。

## 引用文献

家島彦一 1993『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日出版社

金谷美和 2007『布がつくる社会関係—インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版

Gittinger, Mattiebelle 1982 Master Dyers to the World, The Textile Museum, Washington, D.C.

Guy, John 1998 Woven Cargoes—Indian Textiles in the East. Thames and Hudson.

## 2. 研究の目的

本研究は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネシアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳を始めとする資料の検討によって実証的に明らかにするものであった。本研究を通して、私たちが経験する伝統工芸の変革と文化の創出の場面におけるグローバル化の功罪などの本質的意義について批判的視座を提示することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、ヨーロッパに存在する 19～20 世紀初頭にかけてヨーロッパで製造されていたプリント更紗のサンプル帳と、国立民族学博物館の所蔵する日本からの輸出繊維製品に関する資料の調査を行い、プリント更紗におけるグローバルな技法とデザインの影響関係について明らかにすることを試みた。主要な研究課題は、(1) ヨーロッパにおける両面染めプリント更紗の展開の解明、(2) ヨーロッパにおける東アフリカ向けプリント更紗の展開の解明、(3) 日本におけるプリント更紗の展開の解明から成る。

(課題 1) ヨーロッパにおける両面染めプリント更紗の展開の解明。プリント更紗には、片面染めのプリント更紗とともに、両面染めのもが見られる。ジャワ更紗が布の両側からロウ置きを行った後に、布を染液にくぐらせて浸染をするという両面染めであることから、市場価値を高めるためにあえて手間のかかる両面染めのプリントが行われるようになり、両面プリントのための機械の考案がなされたとみなされる。さらには、インドネシア向けの両面染めプリント更紗の製造が、西アフリカ向けの両面染めのワックス・プリントに技術的に展開したと推測される。これを検証するために、サンプル帳のなかからインドネシア向けと西アフリカ向けの両面染めプリント更紗を抽出し、時代系列で並べて、両面染めの技法とデザインの歴史的展開を明らかにした。

(課題 2) ヨーロッパにおける東アフリカ向けプリント更紗の展開の解明。これまでの研究では、ヨーロッパのサンプル帳のなかに東アフリカ向けのプリント更紗についての資料は極めて少ない。そのため、サンプル帳のなかに東アフリカ向けのプリント更紗を発見し、その全体像をつかむことを第一の目的とした。さらに、その中からインド西部の染織品に類似するデザインのサンプルの発見につとめた。それによって、東アフリカ向けのプリント更紗のデザイン起源がインド染織品にあることを検証した。

(課題 3) 日本におけるプリント更紗の展開の解明。旧大阪府産業デザインセンターが所蔵していた日本の輸出繊維製品についての資料のなかに、東アフリカ向けに輸出されたプリント更紗の意匠登録に関する記録を発見した。それらには意匠の写真と、そのうちの一部に意匠登録した企業名が記されている。それを手がかりに関係者や関係施設への調査によって、日本からの東アフリカ向けプリント更紗の生産と販売の歴史について詳細を明らかにすることをめざした。

以上、3つの研究課題を明らかにするために、以下の2つの研究を行った。

#### ①ヨーロッパにおけるプリント更紗に関する調査

平成 23 年度にオランダ、イギリス、スイ

ス、ベルギー各博物館、資料室におけるサンプル帳の全体像を把握するための調査を行い、研究課題に合致したサンプル帳を選定した。平成 24 年、25 年には、前年度に行ったサーベイによって選択されたサンプル帳の調査を重点的に行った。その際、国立民族学博物館標本資料詳細データベースの項目を基に、染織品資料の調査に必要な項目を加えてデータを収集した。調査項目は、標本名、現地名、収集地、制作地、制作年代、素材、技術、色、サイズ、使用地、使用民族、使用年代、用途使用法である。資料の写真を撮影し、画像データ化した。

調査地は、ロッテルダム世界博物館（オランダ）、フリスコ社資料室（オランダ）、グラールス州立博物館（スイス）、ピエール・ブーヴィエ・コレクション（スイス）、ダニエル・ジェニー社資料室（スイス）である。いずれのサンプル帳も、(研究課題 1) と (研究課題 2) の両方に関わるプリント更紗資料が含まれる可能性があるために、資料の見落としがないよう吉本、金谷が共同で作業にあたった。

関連文献を図書館で収集し、オランダ語資料の翻訳を行った。

また、アントワープ服飾博物館、ロッテルダム世界博物館、ライデン大学において専門家と意見交換を行った。

平成 25 年には、ヨーロッパのサンプル帳に発見したインドネシアのイミテーション・バティックの比較研究のために、インドネシアのプカロンガン、ジャカルタにおいて現地工房の調査を行った。

#### ②日本におけるプリント更紗に関する調査

国立民族学博物館に 2010 年に収蔵された旧大阪府産業デザインセンター所蔵の輸出繊維商品関係資料の調査を行った。当該資料は、博物館図書室で整理を待っている段階にあり、閲覧・活用が困難な状態にあった。そのため調査に先立って、資料リストを参照して必要資料の発見と整理を行う必要があった。このために研究補助者を雇用した。

整理が終わった資料のうち、アフリカ輸出处向けのサンプル帳の画像データを作成した。また、国立民族学博物館標本資料詳細データベースの項目を基に、染織品資料の調査に必要な項目を加えてデータを収集した。研究補助者により、データをデジタル化した。

東アフリカ向けのプリント更紗の意匠登録関係の資料をもとに、記載された繊維会社名のリストアップを行い、会社の概要について資料を収集した。また、当該会社の関係者に資料についてのインタビューを行った。

### 4. 研究成果

#### (1) ヨーロッパにおける両面染めプリント更紗の展開の解明

フリスコ社（オランダ）、ロッテルダム世界博物館（オランダ）、グラールス州立博物

館（スイス）、ピエール・ブーヴィエ・コレクション（スイス）、ダニエル・ジェニー社資料室（スイス）のサンプル帳を調査し、①インドネシアで収集したジャワ更紗のサンプル、②インドネシア向けのイミテーション・バティックのサンプル、③西アフリカ向けのイミテーション・バティックのサンプルを発見した。

これらにより、インドネシアのジャワ更紗を模倣してつくられたプリント更紗の系譜を資料により実証的に示すことができた。

表層的なデザインの類似にとどまらず、ジャワ更紗による両面からのロウ置き技法による染色効果を模倣するために、技術的な創意工夫が重ねられていたことが明らかになった。イミテーション・バティックは、最初インドネシア向けに製造されたが、のちに西アフリカ向けに製造されるようになった。西アフリカにおいてプリント更紗は巻衣として使用されていたが、人目にふれる布の表面だけでなく、裏側にも色と模様がおっているものを好む、着衣に対する独特の美意識が存在すること、その美意識にこたえた製品を製造しようとしたための技術開発があったことを明らかにすることができた。

さらに、インドネシアでの現地調査によって、ジャワ更紗の機械化がすすみ、量産品が製造されている流れと逆行するかたちで、手間のかかる両面ロウ置きの手描きバティックや、両面プリントによるプリント更紗の製造が復活、かつ新規に行われている実態を明らかにした。

## （２） ヨーロッパにおける東アフリカ向けプリント更紗の展開の解明

オランダのフリスコ社の所蔵する 108 点のサンプル帳と、ロッテルダム世界博物館の所蔵するサンプル帳 7 点の合計 115 点のサンプル帳について重点的に調査を行い、画像の電子データの撮影、文字資料の一部読解を行った。調査の結果、サンプル帳のなかに①東アフリカ向けのプリント更紗製品のサンプル、②英領インドで収集された染織品、③東アフリカで収集された初期カンガのサンプルを発見することができた。

これらから、インドの染織品のデザインが模倣されて、東アフリカ向けのプリント更紗（カンガ）に展開していった系譜を明らかにすることができた。

この資料はこれまでアフリカ研究の中で調査されたことのない新しい資料であり、20 世紀初頭アフリカの消費文化を明らかにする貴重な資料であることが明らかになった。

ヨーロッパのサンプル帳の調査をもとにした研究の成果については、金谷が平成 24 年 2 月に国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「Consuming Textiles through Their Uses and Reuses」にて「Imprinting Indian design on African Kanga Cloth」という題目で発表した。そこで、シンポジウム

参加者から、サンプル帳の資料的価値について評価が得られた。また、発表内容は、『現代インド研究』誌に研究論文として掲載された。

## （３）日本におけるプリント更紗の展開の解明

日本製造のアフリカ向けプリント更紗の製造について、国立民族学博物館所蔵旧大阪府産業デザインセンターの輸出繊維商品関係資料の分析から明らかにすることができた。日本では、大阪、和歌山、京都、岡山など西日本の製造会社において、アフリカ向けのプリント更紗が製造されていたことを明らかにした。また、ヨーロッパ製アフリカ向けプリント更紗を模倣するかたちで、またヨーロッパの製造会社と競争するかたちで、商品開発を行っていたこと、プリント技術として、ワックス・プリントと直接プリントがあったことを明らかにした。

ワックス・プリントは、ジャワ更紗の技術を模倣して両面からプリントしたものであるが、直接プリントでも、裏通りのよいような工夫がなされていた。

ただし、それらの詳細な技術については、すでに当該製造所が廃止されたり、製造ラインが終了していたりしたために、不明な点もあり、今後、さらに調査を続ける必要がある。

この研究成果については、研究報告書として出版を準備中である。また、この研究成果の一部については、金谷が平成 25 年に国際会議にて、Textile Globalization: Japanese Sample Books on Printed Textile for African Market として発表した。

## （４）サンプル帳の研究の重要性

本研究では、サンプル帳に貼りこまれた実物の染織資料を研究することの重要性を改めて明らかにすることができたと考える。本研究課題（１）と（３）は、インドネシア向け、西アフリカ向けのプリント更紗に関する研究であるが、いずれも、実物の染織資料を熟覧調査することによって初めて明らかにすることができたといつて過言ではない。

例えば、これまでイミテーション・バティックは、ジャワ更紗のデザイン上の模倣についてのみが言及されていたのに対して、本研究は、色や模様の裏通りのよいプリント更紗をつくるために、両面からロウ置きをするというジャワ更紗の技術を模倣して、両面からプリントするという技術を展開したことを明らかにすることができた。また、片面からプリントする場合も、染料の裏通りがよくなるように技術的な工夫がなされていたことがわかった。

一方で、研究課題（２）に関連する東アフリカ向けのプリント更紗は、両面プリントのものではなく、片面プリントのものだけであった。そこに、東アフリカと西アフリカの衣装文化の違いをみることもできる。東アフリカ

向けのプリント更紗が片面プリントであった理由として考えられるのは、一つには東アフリカ向けプリント更紗のデザインのもととなったインドの更紗が、片面からの捺染であったことである。しかし、インド西部には、両面捺染の更紗も存在するために、それだけが理由とは考えられない。なぜ、東アフリカでは片面プリントのプリント更紗が好まれたのかを明らかにするには、消費者サイドからの研究が今後求められる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1. 金谷美和 「国際関係のなかのインド染織品：東アフリカのカンガに関わるオランダのサンプル帳新資料から明らかにする捺染布の展開」『現代インド研究』第3巻 77-95、2013年 (査読有)

[学会発表] (計 2 件)

1. Kanetani Miwa, Textile Globalization: Japanese Sample Books on Printed Textile for African Market, International Conference “What Was Shared and What Was Circulated? Towards Global History of Consumption, Secondhand Circulations and Adaptation”, Institute of Advanced Studies of Asia, The University of Tokyo (23th November 2013)

2. 金谷美和 「アフリカのカンガ布にすりこまれるインドのイメージ」 “Imprinting Indian Image on African Kanga Cloth” 国際ワークショップ Consuming Textiles through Their Uses and Reuses (捨てられるもの 捨てられないもの 布の履歴からモノの消費を考える) 国立民族学博物館 (2012年2月8日)

[図書] (計 4 件)

1. 金谷美和 「オーナメント (装飾) のフェティシズム 移動する布が創りだしたカンガ」田中雅一編『フェティシズム研究の射程 第2巻』京都大学出版、95-119頁、2014年

2. 吉本忍編著『世界の織機と織物』国立民族学博物館、2013年 (396頁)

3. 吉本忍編集責任『更紗今昔物語』(韓国語版) Insitute for Southeast Asian Studies, Busan University of Foreign Studies、2012年 (169頁)

4. 金谷美和 「カトリー 〈グジャラート州〉染色カーストと女性の仕事」金基淑編著『カーストから現代インドを知るための30章』明石書店 216-224頁、2012年

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他] アウトリーチ活動

1. 金谷美和 「衣のグローカリゼーション」『世界民族百科事典』、国立民族学博物館編、丸善出版(2014年6月出版予定)

2. 金谷美和 「もの作りのフィールドワーク」北九州市立大学アジア文化社会研究センターシンポジウム「アジアをあじわう」(2012年7月18日)

3. 金谷美和 「人生を彩る衣 ～印度の絞り染め～」第23回 はんなり京都嶋臺塾 (京都大学地球環境学堂主催) 「つむぐ、まとう」、嶋臺 (2012年3月28日)

4. 金谷美和 「インドの染織と女性」シンポジウム「なぜ、女性たちは織に向かったのかー沖縄から女性美術を考える2」沖縄県立博物館・美術館 (2011年10月15日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉本 忍 (YOSHIMOTO, Shinobu)

国立民族学博物館・民族文化研究部・教授

研究者番号：10124231

(2) 研究分担者

金谷 美和 (KANETANI, Miwa)

国立民族学博物館・民族社会研究部・外来研究員

研究者番号：90423037

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：